

妙法蓮華經。如來壽量品。第十六

爾の時に佛、諸の菩薩及び一切の大衆に告げたまわく、  
諸の善男子、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。

復大衆に告げたまわく、  
汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。

又復諸の大衆に告げたまわく、  
汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし。

是の時に菩薩大衆、彌勒を首として、合掌して佛に白し  
て言さく、

世尊唯願わくは之を説きたまえ。我等當に佛の語を信受し  
たてまつるべし。

是の如く三たび白し已つて復言さく、  
唯願わくは之を説きたまえ。我等當に佛の語を信受したて  
まつるべし。

爾の時に世尊、諸の菩薩の三たび請じて止まざることを  
知しめして、之に告げて言わく、

汝等諦かに聽け、如來の祕密神通の力を。一切世間の天・  
人及び阿修羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて伽耶城

を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得  
たりと謂えり。然るに善男子、我實に成佛してより已來、

無量無邊百千萬億那由他劫なり。  
譬えば五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を、假使人

あつて抹して微塵と爲して、東方五百千萬億那由他阿僧祇の  
國を過ぎて乃ち一塵を下し、是の如く東に行いて是の微塵

を盡くさんが如き、諸の善男子、意に於て云何、是の諸  
の世界は思惟し校計して其の數を知ることを得べしや不や。

彌勒菩薩等俱に佛に白して言さく、

世尊、是の諸の世界は無量無邊にして、算數の知る所に非ず、亦心力の及ぶ所に非ず。一切の聲聞・辟支佛、無漏智を以ても思惟して其の限數を知ることを能わじ。我等阿惟越致地に住すれども、是の事の中に於ては亦達せざる所なり。世尊、是の如き諸の世界無量無邊なり。

爾の時に佛、大菩薩衆に告げたまわく、

諸の善男子、今當に分明に汝等に宣語すべし。是の諸の世界の若しは微塵を著き及び著かざる者を盡く以て塵と爲して、一塵を一劫とせん。我成佛してより已來、復此れに過ぎたること百千萬億那由他阿僧祇劫なり。是れより來、我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

諸の善男子、是の中間に於て我燃燈佛等と説き、又復其れ涅槃に入ると言いき。是の如きは皆方便を以て分別せしなり。

諸の善男子、若し衆生あつて我が所に來至するには、我佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、處處に自ら名字の不同・年紀の大小を説き、亦復現じて當に涅槃に入るべしと言い、又種種の方便を以て微妙の法を説いて、能く衆生をして歡喜の心を發さしめき。

諸の善男子、如來諸の衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては、是の人の爲に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我實に成佛してより已來、久遠なること斯の若し。但方便を以て衆生を教化して、佛道に入らしめんとして是の如き説を作す。

諸の善男子、如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脱

せんが爲なり。或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説するところは皆實にして虚しからず。

所以は何ん、如來は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退、若しは出あることなく、亦在世及び滅度の者なし。實に非ず、虚に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず。斯の如きの事、如來明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生、種種の性・種種の欲・種種の行・種種の憶想・分別あるを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁・譬諭・言辭を以て種種に法を説く。所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。是の如く我成佛してより已來甚だ大に久遠なり。壽命無量阿僧祇劫常住にして滅せず。

諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶お未だ盡きず。復上の數に倍せり。然るに今實の滅度に非れども、而も便ち唱えて當に滅度を取るべしと言う。如來是の方便を以て衆生を教化す。

所以は何ん、若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず。貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如來常に在つて滅せずと見れば、便ち憍恣を起して厭怠を懷き、難遭の想・恭敬の心を生ずること能わず。是の故に如來、方便を以て説く、比丘當に知るべし、諸佛の出世には値遇すべきこと難し。

所以は何ん、諸の薄徳の人は無量百千萬億劫を過ぎて、或は佛を見るあり、或は見ざる者あり。此の事を以ての故に我是の言をなす、

諸の比丘、如來は見るごとく得べきこと難しと。

斯の衆生等是の如き語を聞いては、必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して便ち善根を種ゆべし。是の故に如來、實に滅せずと雖も而も滅度すと言う。又善男子、諸佛如來は法皆是の如し。衆生を度せんが爲なれば皆實にして虚しからず。

譬えば良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練じ善く衆病を治す。其の人諸の子息多し、若しは十・二十乃至百數なり。事の縁あるを以て遠く餘國に至りぬ。諸の子後に他の毒藥を飲む。藥發し悶亂して地に宛轉す。是の時に其の父還り來つて家に歸りぬ。諸の子、毒を飲んで、或は本心を失える或は失わざる者あり。遙かに其の父を見て皆大に歡喜し、拜跪して問訊すらく、

善く安穩に歸りたまえり。我等愚癡にして誤つて毒藥を服せり。願わくは救療せられて更に壽命を賜えと。

父、子等の苦惱すること是の如くなるを見て、諸の經方に依つて好き藥艸の色・香・美味皆悉く具足せるを求めて、擣篔和合して子に與えて服せしむ。而して是の言を作さく、此の大良藥は色・香・美味皆悉く具足せり。汝等服すべし。速かに苦惱を除いて復衆の患なけん。

其の諸の子の中に心を失わざる者は、此の良藥の色・香俱に好きを見て即ち之を服するに、病盡く除こり愈えぬ。餘の心を失える者は其の父の來れるを見て、亦歡喜し問訊して病を治せんことを求索むと雖も、然も其の藥を與うるに而も肯て服せず。所以は何ん、毒氣深く入つて本心を失えるが故に、此の好き色・香ある藥に於て美からずと謂えり。父是の念を作さく、

此の子慙むべし、毒に中られて心皆顛倒せり。我を見て喜

んで救療を求索むと雖も、是の如き好き薬を而も肯て服せず。我今當に方便を設けて此の薬を服せしむべし。

即ち是の言を作さく、

汝等當に知るべし、我今衰老して死の時已に至りぬ。是の好き良薬を今留めて此に在く。汝取つて服すべし、差えじと憂うることなかれと。

是の教を作し已つて復他國に至り、使を遣わして還つて告ぐ、

汝が父已に死しぬと。

是の時に諸の子、父背喪せりと聞いて心大に憂惱して、是の念を作さく、

若し父在しなば我等を慈愍して能く救護せられまし。今者我を捨てて遠く他國に喪したまいぬ。自ら惟るに孤露にして復恃怙なし。

常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、乃ち此の薬の色・香・味美きを知つて、即ち取つて之を服するに毒の病皆愈ゆ。

其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞いて、尋いで便ち來り歸つて咸く之に見えしめんが如し。諸の善男子、意に於て云何、頗し人の能く此の良醫の虚妄の罪を説くあらんや不也、世尊。

不也、世尊。

佛の言わく、

我も亦是の如し。成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫なり。衆生の爲の故に方便力を以て當に滅度すべしと言う。亦能く法の如く我が虚妄の過を説く者あることなけん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い

て言わく、

我佛を得てより來 經たる所の 諸の劫數

無量百千萬 億載阿僧祇なり

常に法を説いて 無數億の衆生を教化して

佛道に入らしむ 爾しより來 無量劫なり

衆生を度せんが爲の故に 方便して涅槃を現ず

而も實には滅度せず 常に此に住して法を説く

我常に此に住すれども 諸の神通力を以て

顛倒の衆生をして 近しと雖も而も見ざらしむ

衆我が滅度を見て 廣く舍利を供養し

咸く皆戀慕を懷いて 渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し 質直にして意柔軟に

一心に佛を見たてまつらんと欲して

自ら身命を惜まざる

時に我及び衆僧 俱に靈鷲山に出ず

我時に衆生に語る 常に此にあつて滅せず

方便力を以ての故に 滅不滅ありと現ず

餘國に衆生の 恭敬し信樂する者あれば

我復彼の中に於て 爲に無上の法を説く

汝等此れを聞かずして 但我滅度すと謂えり

我諸の衆生を見れば 苦海に歿在せり

故に爲に身を現ぜずして 其れをして渴仰を生ぜしむ

其の心戀慕するに因つて 乃ち出でて爲に法を説く

神通力是の如し 阿僧祇劫に於て

常に靈鷲山 及び餘の諸の住處にあり

衆生劫盡きて 大火に焼かると見る時も

我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり

園林諸の堂閣 種種の寶をもつて莊嚴し  
寶樹華果多くして 衆生の遊樂する所なり  
諸天天鼓を撃つて 常に衆の伎樂を作し  
曼陀羅華を雨らして 佛及び大衆に散ず  
我が淨土は毀れざるに 而も衆は焼け盡きて  
憂怖諸の苦惱 是の如き悉く充滿せりと見る  
是の諸の罪の衆生は 惡業の因縁を以て  
阿僧祇劫を過ぐれども 三寶の名を聞かず  
諸の有ゆる功德を修し 柔和質直なる者は  
則ち皆我が身 此にあつて法を説くと見る  
或時は此の衆の爲に 佛壽無量なりと説く  
久しくあつて乃し佛を見たてまつる者には  
爲に佛には値い難しと説く  
我が智力是の如し 慧光照すこと無量に  
壽命無數劫 久しく業を修して得る所なり  
汝等智あらん者 此に於て疑を生ずることなかれ  
當に斷じて永く盡きしむべし  
佛語は實にして虚しからず  
醫の善き方便をもつて 狂子を治せんが爲の故に  
實には在れども而も死すというに  
能く虚妄を説くものなきが如く  
我も亦爲れ世の父 諸の苦患を救う者なり  
凡夫の顛倒せるを爲て 實には在れども而も滅すと言う  
常に我を見るを以ての故に 而も憍恣の心を生じ  
放逸にして五欲に著し 惡道の中に墮ちなん  
我常に衆生の 道を行じ道を行ぜざるを知つて  
度すべき所に隨つて 爲に種種の法を説く

毎つねに自みづから是この念ねんを作なす

何なにを以もつてか衆しゆじよう生じやうをして 無むじやう上じやう道どうに入いり

速すみかに佛ぶつ身しんを成じやう就じゆすることを得えせしめんと